

刊行にあたって

体の中で起こっている組織変化を イメージしながら病変を診ることの重要性

本書は2007年1月に創刊された歯科衛生士向け月刊誌『DHstyle』に2009年12月までの3年間にわたって連載された内容に、いくつかの疾患とコラムを加えたものです。連載にあたって、当初は「歯肉クローズアップ」として、歯科衛生士が日頃よく遭遇する歯肉の病変を、臨床現場の歯科医師や歯科衛生士から提示していただき、その病理組織変化を解説していました。2008年1月からは範囲を広げ、「口腔病変クローズアップ」として、歯肉以外でよく見かける疾患について臨床像と病理組織像の対比を試みました。

病変の臨床像やX線像は、そこで起こっている組織や細胞の変化の現れであり、的確な診断や治療法の選択には病変の本態を知ることが必要不可欠です。例えば、スケーリングやルートプレーニングをするときには、ポケット内にスケーラーを挿入してむやみに根面を搔き上げるのではなく、ポケット内の状況がどのようになっているのかを組織レベルでイメージしながら、指先の感覚を研ぎ澄ましてスケーラーを操作することが極めて重要です。これができるかできないかが、優れた歯科衛生士へのブレイクスルーの1つと言っても過言ではありません。また、口腔にはう蝕や歯周疾患以外にも、さまざまな病気が生じます。なかには、口腔癌のように生命にかかわるものもあります。患者さんを診させていただく折角の機会に、歯や歯肉だけに眼をとらわれることなく、広く口腔を見渡すことが大変重要です。もし病変が見つかったなら、そこで何が起こっているかを組織レベルでイメージしながら異常所見を理解することは、歯科衛生士としての幅を大きく広げると考えます。

このような主旨から、本書では口腔病変の病理組織像を単に解説するだけでなく、臨床像と組織変化との対応が理解できるように、なるべく平易な言葉で噛み砕いて記載することに努めました。また、病変の理解を深めるために、病気の成り立ちや鑑別診断、並びに治療法についても触れました。本書を刊行するにあたって、全体を見直してみると、当初、『DHstyle』の連載として歯科衛生士を対象として執筆しましたが、歯科衛生士のみならず歯科医師にも読んでいただきたい内容になったと思います。チーム医療の現場で、本書が活用されることを願っています。

最後に、本書の刊行にあたって、臨床症例を提示していただいた高橋正光先生をはじめとする歯科医師や歯科衛生士の皆様方、病理からの視点の執筆に協力いただいた広島大学大学院口腔顎顔面病理病態学研究室、並びに広島大学病院口腔検査センターの先生方、そして『DHstyle』への連載と本誌の出版の機会を与えていただいたデンタルダイヤモンド社の佐藤進一氏、山口徹朗氏、木下裕介氏に感謝申し上げます。

2010年1月

高田 隆、小川郁子